国際政治経済論演習　ゼミ論

「中国　発展の要因と今後の課題」

外国語学部英語学科４年　A0151314　松尾　理緒

中国は１９７９年の改革・開放政策以来、爆発的な経済成長を遂げてきた。中国の２００４年度のGDP は１３兆６５１５億元で、前年比９．５％の成長を遂げている。各国の貿易相手国としての重要度はますます高まっており、日本の新聞にも中国関連の記事が載らない日はない。

私は２００３年に上海への２週間の短期留学に参加した際、その成長のエネルギーを肌で感じてきた。都市における貧富の格差など、課題の多さも感じたが、それよりも、あちこちで新しいビルを建設中であったり、街の人々も忙しそうではあるものの何か生き生きとしているような様子を見て、街全体が活気に溢れているように感じ、その成長のエネルギーに圧倒された。

その後、外国語学部の国際政治経済論の授業などで、中国は IMF や世界銀行の提唱した方法ではなく、独自のやり方で成長に成功したという話を聞き、どのような方法であのように高度な成長に成功してきたのかに興味を持った。今回ゼミ論のテーマを選ぶ際に、この中国の発展に関するテーマについて、自分なりに調べてみたいと思ったのが今回のゼミ論を書くきっかけになった。私は今まで中国経済について学んだことはなく、今回ゼミ論によって自分自身が中国についての知識を増やせればという気持ちで書いたものであることを先に述べておきたい。

構成は第一章から四章までで、まず第一章で中国のこれまでの改革・開放政策を概観する。最初に鄧小平以前の政策を振り返り、その後１９７９年から始まった改革・開放政策の進展を、主に４つの時期に分けて見る。また別に対外開放の歩みを年代ごとにまとめた。

第二章では、この論文の主題である、諸改革の成功と政府の役割についてまとめた。中国がこれまで改革に成功してきた要因として、金利の自由化や直接投資受け入れなどの諸政策において、政府が改革に主導的な役割を果たし、漸進的に諸改革を進めてきたことにより、社会的コストを最小限に抑え、産業の高度化に成功してきたことを述べた。また中国が改革に成功した要因には、その初期条件が大きく影響していることを述べ、改革においては初期条件を考慮する必要があることを指摘した。

第三章では、改革にこれまで成功してきた中国の持つ今後の課題として、国有企業改革の進展と地域格差の是正を挙げた。漸進的に改革を行ったゆえに、党と国有企業の癒着という根本的な課題が残されたままの中国では、この国有企業改革の進展が今後の中国の方向性を決めるのではないかと予測した。地域格差については、ますます拡大する沿岸部と内陸部の格差の現状と、是正の必要性、また政府の取り組みについて述べ、是正のためには労働移動の自由化と内陸そのものの開発が必要であることを述べた。

第四章では諸改革に主導的に取り組んだ政府の働きを評価するとともに、残された課題に今後どう取り組むかが、１９７９年来の改革の成否を左右するであろうと予測し、まとめとした。

参考文献　中国経済入門　目覚めた巨龍はどこへ行く　南亮進　牧野文夫編　２００１　日本評論社

中国の経済　開放戦略の理念と手法　賀耀敏・大西健夫編　２００２　早稲田大学出版部

図説中国経済第二版　渡辺利夫　加藤弘之　白砂堤津耶　文大宇著　１９９９　日本評論社

図説中国経済入門　友行啓子著　１９９８　蒼々社

市場経済移行論　溝端佐登史　吉井昌彦編　２００２　世界思想社

中国経済の展望　佐々木信彰編　２０００　世界思想社

中国　未完の経済改革　　綱　関志雄訳　２００４　岩波書店